

社会解体論の原点を求めて

—原初の社会主義者としてのサン＝シモンから初期シカゴ学派が継承したもの—

鎌 田 大 資

In Search of the Source of Social Disorganization Theory
—What Did Early Chicago Sociologists Succeed from Henri de Saint-Simon,
the Original Socialist?—

Daisuke KAMADA

19世紀に造語された社会学という新しい言葉にも、20世紀に入ると学問的な内実が与えられ、量的、質的社会調査を通じてある種の政策科学として機能する現状にいたっている。その際、社会調査の水路を掘りすすめるうえで大きな貢献を遂げたのが、1892年に創設されたシカゴ大学の、世界初の社会学部で研究、教育に取り組みはじめた一群の研究者たちであった。

初期の量的、質的社会調査において多用され、理論的なガイドラインとなった考え方が社会解体論 (social disorganization theory) である。その出典は、ウィリアム・トマスとフロリアン・ズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974. 以下『ポーランド農民』と略記) である。ただし、二人の研究者自身の先行文献を検討しても、どの時点でその着想が得られたかは判然としない。ということは、『ポーランド農民』を執筆中に、二人の著者のあいだでアイデアがひらめいたものと考えられる。ただし19世紀に遡ると、クロード・サン＝シモンの著作中によく似た考え方を見いだすことができる。

論者は、初期シカゴ学派社会学の研究指導に重要な役割を果たしたアーネスト・バージェスの立場からシカゴ学派社会学全体を見直すという試みに取りくんでいる¹⁾。トマスが1918年にシカゴ大学を離れたあとの社会解体論の継承にも、バージェスは重要な役割を果たした。ただしバージェスが私淑し、繰りかえし読みなおしていたのは、サン＝シモンの秘書として学問的著作の世界に参入したオーギュスト・コントとされている (Bogue 1974: xxiv)。そこで、論者はサン＝シモン、コント、またサン＝シモンの死後、サン＝シモン派を形成した一群の人々の著作の関連箇所を検討し、トマスやズナニエツキの研究経歴と対照した結果、サン＝シモン自身のアイデアが生物学、哲学経由でズナニエツキにより摂取され、それがトマスとの合議のうえで『ポーランド農民』に書きこまれたのではな

* 人間関係学部 人間関係学科

いかと推測した。

以下、サン・シモンの思想が伝播され社会解体論が形成された経路を推定、略述する。

1. 近代化論としての社会解体論と再組織論

バージェスは家族社会学の創始者といわれ、彼が摂取した社会解体論、またその系として創案された家族解体論は、バージェス自身の「都市の発展に関する同心円図式」(Burgess 1923=1972)に組みこまれ、『ギャング』(Thrasher [1927] 1963)『ゴールドコーストとスラム』(Zorbaugh [1929] 1976=1997)またクリフォード・ショーとヘンリー・マッケイらの非行研究 (Shaw & McKay [1942] 1969), E. フランクリン・フレイジャーのアフリカ系家族に関する研究 (Frazier [1932] 2005) など、多数のシカゴ・モノグラフの代表作を構成する主要な理論的メタファーとしてもちいられた。

まずポストモダン思想を視野に入れつつ家族社会学史を再構成したカナダの社会学者デビッド・チールによる近代化(modernization)とモダニズム(modernism, 思想史の文脈では近代主義とも訳す)の特徴づけを見る。すなわち、「近代社会の歴史は進歩に向かう近代化の過程」であり、「終わりのない向上また言いかえると進歩(progress)という目標」が与えられ、「社会自体を進歩へ向けて変容させることに関して社会に求められる変化は、もう時代遅れになったとみなされる既存の社会形態の破壊を要請」する。そして「再組織化とは旧秩序の諸要素を新たな、より有益な方向へ再建するものである」²⁾(Cheal 1993: 6)。

伝統的社会秩序からの断絶とその伝統の解体の後の再組織という理論的メタファーは、特にサン・シモンが思想活動を展開した英仏市民革命後の混乱期に発生するにふさわしいものであり、世界で最初に大学の専門学部で社会学という学問を制度化した初期シカゴ学派の社会学者たちも、その発想を継承していると思われる。

家族社会学の幕開けを告げた「相互作用するパーソナリティのシステムとしての家族」という論文で、バージェスの社会解体論は以下のように描きだされている。「家族生活の基本パターンからの闇雲で無目的な(random and aimless)変動」は、「社会が変動を通りぬけつつあるという兆候」であり、「均衡が再確立されれば家族生活の新たなパターンが生じ、それは新たな状況によりよく適応したものとなる」(Burgess 1926: 6)³⁾。

社会解体論は、近年でもロバート・ Sampson らの計量的な非行、犯罪、災害研究において応用され、活用され続けている (Sampson 1993; Sampson et al. 1997)。

2. トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』

バージェスが家族解体論を展開する直前にトマスとズナニエツキの『ポーランド農民』において、社会組織、解体、再組織という3段階を措定する移民社会研究が発表されており、家族解体という用語もすでにもちいられている。

たとえば「社会解体の概念」という節に以下のような文言が見られる。

社会解体は、特定の時期または特定の社会に限定された例外的な現象ではない。社会的規則を破る個人の事例、集団の制度に解体的な影響を及ぼす事例、それを抑止する

ような動きはなくても、集団の制度を増殖させたり、完全に衰退させたりしがちな事例がある場合、そのいくらかは常にどこにでも見出される。しかし社会の安定期にはこうした継続的に発生する初期段階の解体（脱組織化 disorganization）は、社会的制裁の助けを借りて既存の規則の力を強化する集団の活動によって絶えず中和されている。したがって集団制度の安定性は解体と「再組織化」の動的な均衡にすぎない。既存の規則を強化する試みによって社会解体の状況が抑えられないような場合、こうした均衡は乱される。その後、解体が支配的となる時期が生じ、集団の完全な解体にいたる。しかしもっと普通には、新たな再組織化の過程によりこの限界に到達することは抑止され押しとどめられる。この場合、再組織化は衰えつつある組織をただ強化するというだけでなく、集団の変化した要請によりよく適応する新たな行動図式や新たな制度体を生み出すことに存する。こうした新たな図式、制度体の生産を「社会の再建（social reconstruction）」と呼ぶ。社会の再建が可能になるのは、ただ社会解体の時期にも少なくとも集団のメンバーの一部が個人的に解体しておらず、逆に新たでもっと効率的な個人の生活組織に向けてはたらき、新たな社会制度を生産する努力が含意されている個人の活動に建設的傾向を、少なくとも部分的には表出しているためであり、そうである限りにおいてである。（Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974, 2: 1129-1130）

安定した社会も解体と再組織化の均衡のうえに成りたっており、秩序が解体のほうに傾いた場合、特に新たな生活組織を形成するすぐれた個人を中心に再組織の過程が進行すると見るこうした考え方には、一部はトマスの先行研究にその起源を見いだすことができる。しかし、特に社会集団レベルの組織、解体、再組織を見出そうとする視点はトマスの著作からは見出せない（Abbott & Egloff 2008）。したがって共著者のズナニエツキによりもたらされた可能性が高いと思われるが、彼がどのような材料からこの着想を創案しえたかは明確にされていない。

『ポーランド農民』に先行するトマスの「社会心理学という領域」（Thomas 1905）の関連部分を検討する。彼は歴史を切りひらいた大人物について考察し、「天才といわれる人は生物学的には奇形」という表現に優生学的な天才論の影響を感じさせる。またルボンやタルドの群集論、模倣説の用語ももちいている。

集団の意識状態にとって甚大な重要性があるもう一つの出来事は大人物（great personality）の出現である。天才といわれる人は生物学的には奇形であり、その登場は予想もできず前もって決めることもできない。わたしたちは以下のように言える。すなわち、並外れた芸術力また発明力、大いなる勇気、意志、組織の才、宗教的哲学的な問題に関して並外れて影響を受けやすいこと（suggestibility）などの特徴のある一定数の個人が、あらゆる集団にしばしばあらわれ、彼らは自分たちの集団の生活の方向性や意識に力強く影響をおよぼすのである。モーゼ、モハンメド、孔子、キリスト、アリストテレス、ピョートル大帝、ニュートン、ダーウィン、シェークスピアなどは国民生活や、諸個人の精神状態にも同様に消しがたい刻印を残した。今日、ある哲学者のまわりに一群の思想家が育ち、宗教指導者のまわりに狂信的に信仰心の厚い

信奉者たちの集団ができるという事実は、共同 (associated) 生活の始まり以来、力をふるい、全集団の歴史において、大多数の人々の思考と活動を固定した経路に導くことになりがちだった模倣の原理の繰りかえしである。コロンブスの卵の原理について、口火を切る人がいればそれに従う人々もいる。白人が到来してその影響力を打ちやぶるまで、中央オーストラリアのオクニラバタ (oknirabata)⁴⁾は、自分の小さな集団において、もっと大きな集団でのアリストテレスと同じくらい影響力があり、孔子や孟子によって説きかえられた行動の原則を中国人は今日でも実施しており、古い習慣を廃して新しい習慣を確立するほど重大な危機に邪魔されることもなかった。呪術師 (medicine man)、僧侶、政治指導者、思想家、扇動家、芸術家によって、また、より一般的に普通ではない人物によって信念や実践の手本が決められる様子や、世論や群衆行動 (mob action) においてのほうが自発的に暗示や催眠術が姿を現しやすいうことは、個人のまた集団の意識という両様の観点から研究されることになる。(Thomas 1905: 448. 下線による強調は引用者)

すぐれた個人が社会の再組織 (再建) に大きな役割を果たすというこうした言説は、19世紀の社会進化論に特有のものではある。それゆえ、20世紀初頭という時代を考えると、こうした論調に出会ってもなんら違和感を抱かせられることはないが、ただ偉大な個人に注目するということが、社会組織、解体、再組織を一連の過程として捉えて、記述、解釈しようとするきわめて社会学的な観点とのあいだには、まだ埋めるべき若干の落差が存在する。

3. 社会組織、解体、再組織論の起源としてのサン＝シモン

もちろん『ポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974) における組織の解体から再組織へという社会過程の捉え方を導入したのが、トマス・カズナニエツキかどちらなのかははっきりしない。先述のトマスのもの以外の両者の著作にも、はっきりとその発想源を指摘しようような言及は見当たらない。したがって、ほかに推論の材料がない限りは、二人の共同研究において、どちらからともなく持ちだされたものという程度に解釈しておくのが無難だと思われる。ただし組織、解体、再組織という社会組織の脈動のような動きとよく似た考え方が、19世紀の思想家、サン＝シモンの学説のなかに見いだされる。最終的には、晩年の弟子であった銀行家、オランド・ロドリグらがまとめたサン＝シモン派の教義の連続講義記録において、この時代区分は組織の時代と批判の時代と呼び分けられることになった (Enfantin et al. 1831: 137-142=1982: 62-66; 中村 1989a)。その時点ではサン＝シモン晩年の『新キリスト教』([1825] 1977: (3-7) 97-191=1988: (5) 239-295) の教義を補完すべく、人類の未来において実現されるべき普遍的アソシアシオン (協同社会) に到達する前段階として、コントの神学的段階、形而上学的段階、実証的段階のうち、形而上学的段階に当たる中世から近世初期にかけての時期が批判の時代として捉えられるようになった。こうしたヨーロッパ文明の大規模な推移の捉え方には、歴史把握のうえで固有の価値があると思われる。しかし、シカゴ学派が最盛期を迎えた1920年代という当時の「現代社会」を、多様な価値観が衝突しあい、お互いに打ちけしあって新たな道

徳観が形成される前段階と見なす社会解体論の視点には結びつかず、身近なところで観察される社会現象の調査には応用できない。しかし革命後のナポレオンの帝政と王政復古の時代の思想的道徳的混乱を克服しようとする問題意識に駆りたてられていたサン＝シモン自身は、革命期直前の百科全書派を革命的批判的な立場と特徴づけ、道徳の混乱をもたらした元凶と捉えるような視点も持っていた。ただし際限なく思いつきを書きしるすスタイルで、過去の歴史の捉えかえしと政治情勢を踏まえた政策提言を交互に発表していったサン＝シモンの生涯において、一つの表現が一貫して使い続けられることは比較的まれである。むしろ彼はそのあふれる独創性の赴くままに、自らの着想を述べつたえ、コトをはじめとするその時々秘書たちに清書させていった。組織と批判の交互運動も、多様に設定される二項対立や時代把握と重ねがきされ、執筆のたびごとに完結して、その後、他のアイデアと結びついて有機的に発展していくことはあまりなかった。だから、わたしたちには、サン＝シモンの個々の表現を並べその変遷を概観しながら、後世の思想界に現れる理論的表象と照らしあわせて、その影響を推しはかることしかできない。ここでサン＝シモン自身の著述の流れを便宜的に以下のように整理しておく。1. 初期の19世紀版の百科全書の作成、出版計画を共和制、帝制、王制と変遷した各権力者に上申する文書類、2. 最初は主に資本をもつブルジョワを意味していた産業者を中心に、生産力を高め効率的に管理する体制を具体的に提言する文書類、3. 晩年の『新キリスト教』などに表明されたサン＝シモン流のキリスト教解釈に基づき、ブルジョワではなくむしろ資本家に雇用される立場の労働者に、その語義を読みかえた「産業者」の福利厚生を増進する現在の福祉国家につながる体制の提言⁵⁾。

以下にサン＝シモンによる組織と批判の時代の交互運動についての表象の事例を挙げる。19世紀前半というフランス社会の激動期に混乱を收拾して新たな秩序を模索する姿勢が現れた諸部分である。

まず、ピストンの上下運動に一般化と特殊化の思想の交互運動をたどった部分が、前記1の時期の「19世紀の科学的研究序説 第1巻」([1807] 1977: (6): 1-216=1987: (1) 89-204)⁶⁾に見られる。

一般化することと特殊化することとは、収縮と拡張とが身体生活にとって必要な作用であるのとまったく同様に、精神生活にとって必要不可欠な作用である。これらのものは、人間の精神が等しい時間間隔で交互におこなう機能である。(1807-1808: (6) 29=1987: (1) 106)

学派はロックおよびニュートンの仕事をデカルトの仕事と対立づけるようなことを決してしなかったであろう。学派は、総合的方法と分析的方法という二つの方法のいずれがすぐれているかといった議論をしなかったであろう。それは、ポンプの活動にとってピストンが上がるのと下がるのとどちらがより価値があるかを検討するという考えと同様に馬鹿げた考えである。このような問いに対する答えは、こうである。ピストンがポンプの上部にあれば、それは下げられなければならない。下部にある時は上げられなければならない。ポンプの活動を保っているのは、高さから低きへ、低きから高さへのピストンの交互的な運動である。(1807] 1977: (6) 32-33=1987: (1) 109)

さらに、前記2の時期に差しかかる「ヨーロッパ社会の再組織について」([1814] 1977: (1-1) 53-248=1987: (2) 197-260) では以下のように述べている。

18世紀の哲学は革命的であった。19世紀の哲学は組織化的 (organisatrice) でなければならぬ。

制度の欠如は社会全体を崩壊に導く。悪しき制度は、それらの制度をつくった時代の無知と偏見とを長引かせる。われわれは野蛮か愚昧かのどちらか一方を選ばなければならぬのであろうか。 ([1814] 1977: (1-1) 158=1987: (2) 200)

教皇の権威、国王の無制限の権力、貴族および僧侶の特権、彼らの富は、いずれも同様にすべて、フランスを再組織するためには転覆させなければならなかった障害であった。

世論が築きあげたこれらの権力を破壊する仕事は、世論によって開始されなければならなかった。18世紀の仕事はこれであった。聖職者団は嘲笑され、専制的権力は憎まれ、貴族は人望を失わされた。

18世紀の仕事の結実である『百科全書 (アンシクロペディー)』は、古い秩序を支えてきた積年の一切の偏見、正しいものと信じられてきた一切の誤謬を一挙に打倒して、決定的な打撃を与えた。

著作家たちによって準備された革命は、アメリカの独立戦争によって促進された。アメリカの支持者たちが自由ではあるが圧制に苦しむアメリカ国民との交際から得た自由と自由主義的制度の思想、一切の専制に対する憎悪は、間もなくフランス国民の一部に広がり、危機が始まった。

王権、また貴族と僧侶の権力は、すでにその土台を覆され、ただ空しい抵抗をするだけであった。彼らは財産を没収され、追放された。国王といえども容赦されなかった。 ([1814] 1977: (1-1) 218-219=1987: (2) 240)

フランス革命直前の啓蒙思想について「18世紀の哲学は革命的」と断じ、「19世紀の哲学は組織的でなければならぬ」と要請する引用文の冒頭部分こそが、トマスとズナニエツキの社会解体と再組織という議論に直結する視点となっている。「制度の欠如は社会全体を崩壊に導く。悪しき制度は、それらの制度をつくった時代の無知と偏見とを長引かせる」と、サン＝シモンが執筆した当時の混乱した社会を批判の時代と捉え、組織の時代として新たな制度の再組織を構想する視点こそが、1920年代から30年代にかけてのシカゴ市の雑多な社会現象を混乱した状況のままに記述し、それを材料とした再組織を構想する初期シカゴ学派の都市研究の視点に通じる。かつてあったかも知れない秩序が乱れて、現状では多数の規範や尺度が並立する価値観の乱立状態がもたらされている。そこに導入されるのが、サン＝シモンが提唱する再組織である。そのための方策は、サン＝シモンの思想活動の初期には19世紀版百科全書の提唱であった。そして、そうした視点はのちのサン＝シモン派の歴史把握において、封建制度から近代へと向かう大きな歴史の流れに、批判の時代と組織の時代の循環を見る文明史的議論へと発展していく。しかし初期シカゴ学派の社会学者たちが1920年代から1930年代にかけての大都市シカゴの風俗、規律の混乱状態を読みとく道具だてとしては、大所高所から歴史の循環を睥睨する視点ではなく、現

状の無秩序状態をかつてあったかもしれない秩序と比べ、無数の価値観が乱立するがゆえの混乱として、分析的に読みとく視点のほうが機能的であったと思われる。ただしこうした文言がサン＝シモンのテキストに存在するを知っただけでは、それが後世にどのように活用されたのかを論証することにはならない。もちろん社会秩序の解体から再構成へという着想自体が、もっと別の源泉から発している可能性も考慮すべきであり、サン＝シモンが上記のように書きしるした着想が、ヨーロッパとアメリカの思想界の、複雑な襲をなす隙間の各所で支持者、共感者を増やし、やがては『ポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974) というテキストにその変容した姿を記録することになるといった出来事の筋道を仮想し、妄想をたくましくしているだけといわれても反論はできない。

さらにサン＝シモンから初期シカゴ学派社会学への継承について詳述するまえに、『産業』第2巻 ([1817] 1977: (1-2) 17-223=1987: (2) 315-61) でのサン＝シモンが市民社会の思想家となっていたことも見ておきたい。以下の引用文の「産業」を「市民社会」と置き換えると、フーコーが、シエスらフランス革命の指導者たちの人権アプローチと対比しつつ、整理したアダム・ファーガソン以来の市民社会論となる⁷⁾。

サン＝シモンによると、勤労者の業務のひとつは「無為の有閑人たちが暴力をもちいて産業を脅かすのを阻止することを目的とする仕事」であり、それを政府が肩代わりして「無為の有閑人を規制」することになる⁸⁾。さらに「産業はできるだけ少なく統治されることを欲する。このためにとりうる手段は一つしかない。できるだけ金をかけずに安あがりの統治をさせるようにもっていくこと」である ([1817] 1977: (1-2) 131-132=1987: (2) 319)⁹⁾。

そして『産業』第2巻 (1817) のうち「政治的・哲学的通信 H・サン＝シモンの一アメリカ人への手紙」 ([1817] 1977: (1-2) 138-214=1987: (2) 324-361) では、以下のような考えが披瀝されている。

すなわち彼は、無秩序のなかでは発展できない産業にとって統治は必要悪であると考えている ([1817] 1977: (1-2) 200=1987: (2) 352)。フランス革命からナポレオンの帝政を経て王政復古の時代まで、社会的混乱のなかで財をなし、著述しながら蕩尽し、社会や為政者に提言をつづけたサン＝シモンは、革命によってもたらされた荒廃から、いかに再び産業が発展するかを模索する思想家であった。すなわち革命自体が生み出す社会的混乱や、革命後の集団ヒステリーを避けるために、どうすればいいかと考えるサン＝シモンの社会再組織の考え方は、その渦中に生きざるを得なかった人特有の、革命を忌避する思想でもある¹⁰⁾。

血みどろの革命のあと、批判精神に産業が引き回される。そして自由であろうとする欲求と情熱は、産業により生み出される ([1817] 1977: (1-2) 209-210=1987: (2) 357-358)¹¹⁾。

サン＝シモンの弟子たちを社会主義者 (socialist) と呼んだのが、「社会主義」という言葉の最初の用例とされることが多い (Bell 1968)。この場合、サン＝シモンを社会主義者とするなら、それは、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの『共産党宣言』Marx & Engels [1848] 2008=1971) によって政治綱領化され、後のスターリン独裁の根拠となったプロレタリア独裁などの考え方が注入されるまえの、原初の社会主義であり、その多様な方向性のなかには、現今の高度資本主義社会の投資行動の先駆というべき、公債

を発行してスエズ運河を開削する際の投資促進による景気浮揚まで含まれていた。資本主義という言葉自体が19世紀末から20世紀初頭にかけての造語であり、サン＝シモンの活動時期には存在しないことを考えると、彼の社会主義には資本主義の発展の一樣相も確実に含まれ、それ自体がきわめて幅広く可能性に満ちた思想だったことを理解しなければならないだろう（高良 2016）。

ただし、晩年の『産業者の教理問答』（[1824-1825] 1977: (4) 1-207, (5-10) 1-47=1988: (5) 1-162）、『新キリスト教』（[1825] 1977: (3-7) 97-191=1988: (5) 239-295）では、のちの福祉国家化に動機づけを与えるような、労働者（産業者）のための福祉的施策を、サン＝シモンは提唱するようになる。

4. 直接の理論的ヒントとなった可能性がある『創造的進化』

サン＝シモンの思想の評価は、諸所においてなされた具体的政策提言についてよりも、むしろ批判の時代と組織の時代の対比に典型的に見られる歴史事象の大雑把な掴まえ方についての方が高いだろう。またフランス革命によって人権宣言がなされ、ナポレオン憲法によって、人権擁護の思想を中核とする憲法を最高法規に据え、それ以後の為政者に最低限守るべき国民一人ひとりの権利を承認させたという歴史的事件によってもたらされ得た社会や国家の不可逆的変貌をしっかりと刻みこんだうえで、過去の社会への郷愁に流されず新秩序を再組織する彼の志こそが評価されたにちがいない。その百科全書的な知の集大成への要請は、コント、ハーバート・スペンサー、J. S. ミルらの実証主義哲学を通じて広く人口に膾炙し精緻化された。また革命の思想家、マルクス、エンゲルスら、社会学者、エミール・デュルケムらもそれぞれにその遺産を継承して自分たちの著作にそのエッセンスを取りいれている（Engels [1821] 1962=1999; Durkheim 1928=1977）。

そうしたサン＝シモンの思想的、社会的影響力から、直接の言及がなくとも社会解体や再組織に関する議論の源泉として、彼の思想が意識された可能性があるかと推定できる。ただズナニエツキは、パリにいた1913年に、アンリ・ベルグソンの『創造的進化』のポーランド語訳を出版しており、そのなかでフーゴー・ド・フリースによる突然変異説（de Vries 1901-1903=1925）の説明がサン＝シモン風にまとめられている。直接にはここが『ポーランド農民』（Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1971）の議論の出発点かもしれないと論者は推定する。ド・フリースの原典にはサン＝シモンの思想やレトリックの影響は感じられないので、このベルグソンのまとめ方自体がサン＝シモンの著作の影響を受けたものと考えべきなのかもしれない。

[……] [チャールズ・] ダーウィンは、感知できない変異の蓄積によって、種の生成を説明したのだ。以上はまた現在の多くの博物学者の見解でもある。しかし、この見解は、逆の考え方に場所を譲ろうとしている。つまり、新しい種は、以前とはかなり異なった新しいいくつかの特質が同時に現れることによって、突然構成されるという考え方である。この後の仮説を、様々な著述家、とりわけ [ウィリアム・] ベイトソンが目すべき本のなかで表明したが、この仮説が深い意味を持ち、きわめて大きな力を獲得するようになったのは、フーゴー・ド・フリースのすばらしい実験以来

のことである。この植物学者は、オオマツヨイグサの実験で、何世代か後に、いくつかの新しい種を獲得した。彼が実験から取り出している理論は、きわめて興味深いものである。この理論によれば、種は、安定期と変形期を交互に経過するが、「変異」期が訪れると、予想もしない形態を生み出すのである。われわれはこの仮説と感知できない変異の仮説のどちらかにあえて与するつもりはない。ただ、ここで引き合いに出されている変異が、大きいものであれ小さいものであれ、それらが偶然的なものであるのなら、われわれが示したような構造の類似を説明することはできないということを示したいだけなのである。(Bergson [1907] 1941: 63-64=2010: 92)

「種は、安定期と変形期を交互に経過するが、「変異」期が訪れると、予想もしない形態を生み出す」という表現自体が、ベルグソン特有の哲学的イマジネーションにあふれている。すなわち、神学的な意味で、神の天地創造を否定したあとでも、自然淘汰や適者生存などで説明される「進化」という仕組み自体が生物種を変化、変遷させる「創造者」でもあるという『創造的進化』の中心テーマを適切に言いあらわしている(三宅 2009)。もともとトマスが抱いていた生活の再組織をおこなう優生学的な天才像に、ズナニエツキがベルグソンから摂取した「生のはずみ (élan vital)」の概念が接合されて、より有機的社会的な広がりを持った再組織者像が立ちあられ、さらにそれがパーソナリティ論において(ボヘミアン、フィリスティンと対比される)創造的個人 (creative individual) のイメージに結実していったとすれば、そうした諸概念の積みかさねこそトマスとズナニエツキという二人の知識人が力を合わせた有機的分業の、果実の現れであるように思われる。

ま と め

初期シカゴ学派で活用された社会解体論また家族解体論は、トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』(Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974)で発案された考え方だが、二人の著者のどちらが主導してまとめたものか、またどのような過去の知的資源をもちいて作成したものか、詳細は明らかではない。本論では、仮に19世紀の、原初の社会主義者、サン・シモンの著作にその起源があるのではないかと想定し、サン・シモンやその周辺の著述家の著作を検討した。そして、サン・シモンの著作はフランスを中心に多くの実証主義的著述家に広く読まれ、影響を与えていることを前提に、その著作のある部分が、ベルグソンの『創造的進化』の一節に取りこまれ、フランス語からポーランド語への翻訳者であったズナニエツキが、トマスとの合議のうえで手直しを加え、『ポーランド農民』の鍵となる概念として創案したと推定した。サン・シモンはその死後、社会主義者と呼ばれることになるが、夜警国家論的な市民国家観を奉じ、晩年には産業者のなかでも資本家に雇用される労働者の立場に目をとめ、国民の大多数を占め、しかも産業を成立させ発展させる原動力である彼らにとって住みよい社会を作るべきだとして、福祉国家的な構想も提唱している。すなわち、19世紀前半の段階で、サン・シモンは20世紀社会の重要な要素となるものを、多数、あふれる独創性と先見性によって公共の議論の世界に提示している。したがって、20世紀社会学を先駆的、開拓者的に切りひらき、現在の社会調査の基礎を築いた初期シカゴ社会学への彼の影響を、従来よりやや大きく見つめてみたとしても、

決して過大評価ということにはならないだろう。

注

1) 初期シカゴ学派の全米社会学界における勢力が最大化した1930年ごろからその活動が量的社会調査、質的社会調査の全米社会学における興隆とともに拡散していった1950年代までの期間を含め、バージェスは、その80年の生涯の大半を費やして、社会調査という運動を牽引、支持、支援した。鎌田・中野(2003-2005); 鎌田(2016, 2016a)などを参照。

2) 念のため、引用箇所的前後を掲出する。

モダニズムの観点からすると、近代社会の歴史は進歩に向かう近代化の過程と理解される。すなわちそれは、新しい行為の形式を絶え間なく発明することによって人間の条件を向上させるということである。終わりのない向上また言いかえると進歩 (progress) という目標により、未来には人々の生活がよくなるようにするため、人々のいまの暮らし方を変えることが正当化される。歴史的に、こうした進歩の観念は革命的な結果をもたらしてきた。それは、いつでも明日には物事が今日の姿よりもよくなりうると信じてきた。次には、進歩しうる余地を作るため、既存の事柄の秩序を転覆する準備をすることにつながる。ということは、伝統とは断絶する準備をしておくということでもある。

モダニズムの第一に顕著な特徴は変化へ向かう志向である。問題解決に理性を適用するということで、人間同士の協調が達成され、個々の行為は価値の実現へむけて方向づけられうると信じられている。かといって、近代社会がいつもよく組織だてられたものだとは限らない。それどころか、社会自体を進歩へ向けて変容させることに関して社会に求められる変化は、もう時代遅れになったとみなされる既存の社会形態の破壊を要請することがよくある。極度の分解 (disintegration) は、もちろん、協同から得られる利益を損なう。したがってモダニストは以下のように信じる。すなわち、分解へ向かう傾向には再組織化の創造的な力という反作用が生じる。そして再組織化とは旧秩序の諸要素を新たなより有益な方向へ再建するものであると。(Cheal 1993: 6. 引用文中の参考文献を1件省略。本論では本文、注ともに下線による強調は引用者)

3) 引用箇所の原文は以下の通り。

家族生活の基本パターンからの闇雲で無目的な変動は、[……] 家族生活と性的関係の未来を指ししめすものではない。そうしたことは、現在のところ、過去の同様の時期と同じように、社会が変動を通りぬけつつあるという兆候にすぎない。均衡が再確立されれば家族生活の新たなパターンが生じ、それは新たな状況によりよく適応したものとなる。とはいえそれも、家族における対人関係の古くから親しまれた類型に対して、それとは少し異なった変種であるに過ぎない。(Burgess 1926: 6. なお本論では、引用文中、[……] は引用者による省略を表し、[] で囲った文言は引用者による補足を示す)

4) 部族の習俗に精通した老人 (Spencer & Gillen 1899: 438-439)。

5) この時期区分は本論の目的のために提示した便宜的かつ簡略なものに過ぎない。サン・シモン理解のためのより詳しい時期区分については Manuel (1956=1975), 森 (1987-1988), 中村 (1989) らを参照。

6) サン・シモンの著作は原文、邦訳ともに著作集の参照箇所を、原著者名を省略して示す。原文に関しては1977年に再版された Slatkin Reprint 版をもちいているが、これは1868-1878の Anthropos 版を底本とし、E. Dentu 編の Librairie de la société des gens de lettres 版の2, 3巻ずつを1巻に合冊している。したがって1巻に2箇所以上の同じページ数で表記される部分を含んでいることがある。本稿では誤解を避けるため、たとえば Anthropos 版の1巻に元の1, 2巻

が合冊されている場合に、(1-1) (1-2)としてページ数のまえに該当する巻数を表記する。邦訳に関してもサン＝シモン著作集の巻数を(1) 23-24のようにページ数の前に括弧に入れて表記する。なお引用文中には、漢字をかなに直すなど邦訳の表記を本論の表記スタイルに合わせて改めた箇所がある。

- 7) 市民社会の思想家としてのサン＝シモンについてここで考察するのは蛇足のようにも見える。しかし、初期シカゴ学派研究とも関連し、日本とヨーロッパにおける公共圏成立史の対比を論じた近年の論者自身の考察の系列において、「市民社会」という考え方は重要なので、あえてこの言及を挿入する(鎌田 2014, 2015, 2015a, 2015b)。
- 8) 念のため、引用文の前後を提示しておく。

それゆえ、勤労者 (*les travailleurs*) は自分たちの労働の目的である快楽をむざむざ奪いとられる憂き目にあう危険にさらされているのである。このような危険があるので、労働者たちにとっては特殊な必要が生じてくる。そしてこの必要から、他のさまざまな仕事とは異なった一つの仕事、つまり無為の有閑人たちが暴力をもちいて産業を脅かすのを阻止することを目的とする仕事が生じる。

産業の見地からすれば、政府はこの仕事を担当するものにほかならない。政府がなすべきことは、無為の有閑人を規制することである。政府の活動がこの範囲を越える時、政府は専断的で侵害的となり、したがって産業に対して暴虐的で敵対的になる。悪を根絶することを目的とする政府が、みずから悪を働くことになる。人は自分のために働くのであるから、自分の思う通りのやり方で働くことを欲する。産業をしのぐ異質的な力が産業に干渉し、産業を支配する時はいつでも、産業は妨げられ、気力をそがれる。産業の活動は、産業がこうむる拘束に正確に比例して衰退する。たとえ勤勉に働く人たち (*les industriels*) が統治されることがありうるとしても、それは産業にたずさわる者としての資格においてではない。

もし政府の活動が社会にとって有益な奉仕をしていると判断されるならば、社会はこの奉仕に対して代金の支払いをすることに同意しなければならない。([1817] 1977: (1-2) 130-131=1987: (2) 318)

- 9) ただしフーコーのように、生産力を確保するため、為政者の不利な干渉をはね返そうとするブルジョワを中心とした政治的、社会的な力や存在感を市民社会として捉える視点は、ファergusンのテキストではそれほどはっきりと表明されていない。したがって、サン＝シモンや彼に影響を与えたアダム・スミス以来の古典派経済学者たちの発言を合成した「夜警国家論」の一種として、フーコーの市民社会論は構想されているのではないかと思われる。参考までに、フーコーによる市民社会論と人権アプローチの対比を要約によって示す。この市民社会論に関する論点は、2004年に刊行された1978年から1979年にかけての講義録で語られ、晩年の自己のテクノロジーをめぐる新たな思想を展開するうえでの転換点を構成している。

ブルジョワ革命の時代における問題は、主権の基礎づけ、主権者の正当性の条件、主権者の法権利の行使の正当性の条件などではなく、公権力の行使にどのように法的な限度を設ければよいかであり、そこに2つの道が存在する。

1. 法的かつ演繹的な公理の道。これはフランス革命とルソーの道である。あらゆる個人に帰属する自然的ないし根源的な法権利を規定し、法権利の制限、交換、譲渡が受け入れられるようになった理念的、歴史的手続きを明らかにする。そして、譲渡が受け入れられた法権利は何で、譲渡が認められずあらゆる可能な統治、政治体制のもとで不可侵のものでありつづけたのは、どのような法権利かを規定しようとする。統治の権限の境界は、主権そのものを構成する枠組のなかで演繹できるようになる。人権から出発し主権の構成を經由して統治性の境界画定に至る。これは革命の道であり、17世紀の自然権の理論家

とフランス革命における法学者、立法者たちとの連続性が見いだされるところである。

2. 統治実践そのものから出発しようとする道。市民社会論では、統治性に対し設けられる事実上の限界との関連で分析がおこなわれる。そして統治には無用となるものが何かを抽出し、統治にとって何をおこなわないのが有用、無用なのかを問う。イギリス的ラディカリズムの問いは有用性の問題と関連づけられる。功利主義とは統治のための一つのテクノロジーである。(Foucault 2004: 40-42=2008: 48-50)

- 10) サン＝シモンに顕著なこうした革命忌避の傾向は、いささか異なった文脈で「社会化」批判の発言を繰り返しつつ、第一次世界大戦直後の、ごく短命に終わった「ドイツ革命」に巻きこまれていったマックス・ウェーバーと同様である。ウェーバーの場合は、ドイツでの社会民主党の腐敗墮落ぶりに絶望したために革命路線を批判した。濱島(1980)参照。

- 11) この引用文の前後は以下の通り。

異議を申し立て批判する精神は、日毎に強まった。すさまじい衝撃によって権力の最後の砦が奪い取られ、封建制と神政政治の最も微細な痕跡すらがことごとく拭い去られるに至る時まで、自由は隊伍を組んで前進し、制覇をとげていった。だが、なぜ、われわれの革命は血みどろで、恐るべき、非人道的なものだったのか。なぜ、自由のためのこの大作業は新しい形態の隷属しか生み出さなかったのであろうか。

それは、産業がその進路から逸らされてしまい、自分の本分を忘れ、自分とは無縁な戦術に、長い間、加担し続けたからである。

先に述べたあの異議を申し立て、批判する精神が産業のはやる気持を焚きつけたので、産業は有頂点になってこれに身を委ねた。産業は身分の敵対者を弱めるものなら何でも、ただそれだけで自分にとって有益なものだと思いきんだ。ここに産業の誤りがあった。なぜなら、社会の目的がたちまち見失われてしまったからである。現実的で切実な欲求の代わりに、漠とした際限のない欲求、空想的な欲求が、自由のための事業を牛耳った。人々はあまりにも多くのことをあまりにも熱烈に欲したので、組織的に節度をもって着実にやっつけようとするのができなかった。自由愛は次第に権力への憎しみにと変わった。あげくの果てに人々は、間もなく、獲得した領土に身を落ちつけて自分を強固にさせようとはせず、せつかく獲得したものを破壊し、火に投げようと思いついたつにいたった。利害の闘争しか存在しえなかった状態は、皆殺し戦争となって現われた。権力が倒されたことは事実だが、自由はまったく確立されなかった。人々は自由の基礎が何であるかを忘れていた。自由の基礎、それは、産業である。

自由であろうとする欲求と情熱とは、産業とともに、産業によって生み出された。自由は、産業とともにしか増大できず、産業によってしか強化しえない。([1817] 1977: (1-2) 209-210=1987: (2) 357-358)

参考文献

- Abbott, Andrew and Rainer Egloff, 2008, "The Polish Peasant in Oberlin and Chicago: The Intellectual Trajectory of W. I. Thomas," *American Sociologist*, 39: 217-258.
- Bell, Daniel, 1968, "Socialism," David L. Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 14, 506-534.
- Bergson, Henri (anno., Arnaud François), [1907] 1941, *L'Evolution créatrice*, Presses Universitaires de France. (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k205342>. 2016年9月9日閲覧) (=1913, tr., Florian Znaniecki, *Ewolucja twórcza*, Warszawa: Towarzystwa Literatów i Dziennikarzy Polskich.) (=2010, 合田正人・松井久訳, 『創造的進化』筑摩書房.)

- Bogue, Donald J., 1974, "Introduction", Donald J. Bogue, ed., *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Chicago: Community and Family Study Center, University of Chicago, ix-xxv.
- Burgess, Ernest W., 1923, "The Growth of the City," *Publications of the American Sociological Society*, 18: 85-97. (=1972, 大道安次郎・倉田和四生訳, 「都市の発展——調査計画序論」, Robert E. Park and Ernest Burgess, eds., 『都市——人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会, 49-64.)
- 1926, "The Family as a Unit of Interacting Personalities," *Family*, 7: 3-9.
- Cheal, David, 1993, "Unity and Difference in Postmodern Families," *Journal of Family Issues*, 14: 5-19.
- de Vries, Hugo, 1901-1903, *Die Mutationstheorie: Versuche und Beobachtungen über die Entstehung von Arten im Pflanzenreich*, Vol. 1, 2, Leipzig, Verlag von Veit. (<http://www.biodiversitylibrary.org/bibliography/11336#/summary>. 2016年9月9日閲覧) (=1925, 横田千元譯, 『生物突變説』白揚社.)
- Durkheim, Émile (éd., M. Mauss), 1928, *Le socialisme: sa définition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, Paris: Alcan. (http://classiques.uqac.ca/classiques/Durkheim_emile/le_socialisme/le_socialisme.html. 2016年11月24日閲覧) (=1977, 森博訳, 『社会主義およびサン・シモン』恒星社厚生閣.)
- Enfantin, Barthélémy-Prosper, Hippolyte Carnot, Henri Fournel et Charles Duveyrier, 1831, *Doctrine de Saint-Simon: exposition, première année, 1828-1829* (Troisième édition revue et augmentée). (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5504358p>. 2016年9月1日閲覧) (=1982, 野地洋行訳, 『サン・シモン主義宣言——『サン・シモンの学説・解義』第一年度, 1828-1829』木鐸社.)
- Engels, Friedrich, [1982] 1962, "Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft", *Karl Marx/Friedrich Engels-Werke*, Band 19, Berlin/DDR: Dietz, 189-201. (http://www.mlwerke.de/me/me19/me19_177.htm. 2016年11月24日閲覧) (=1999, 石田精一訳, 『空想から科学へ』新日本出版社.)
- Foucault, Michel, 2004, *Naissance de la Biopolitique: Cour de Collège de France (1978-1979)*, Paris: Gallimard/Seuil. (=2008, 慎改康之訳, 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義1978-1979年度』筑摩書房.)
- Frazier, E. Franklin, [1932] 2005, *The Negro Family in Chicago*, London: Routledge.
- 濱島胡, 1980, 『ウェーバーと社会主義』有斐閣.
- 鎌田大資, 2014, 「市民社会をもたらす公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハバースマスとシンボリック・インタラクショニズムの融合」『現代社会学部紀要』8(1): 19-45. (中京大学)
- 2015, 「市民社会, 人権, 公共圏の学としての社会学——英仏市民革命期における二つの思想潮流」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 46: 1-12.
- 2015a, 「コンドルセに由来する二つの遺産——量的, 質的社会調査の発生と展開」『人間関係学研究』13: 51-64. (椋山女学園大学)
- 2015b, 「日本出版統制史再考——序説・江戸時代初期享保以前」『金城学院大学論集』(社会科学編), 12(1): 54-70.
- 2016, 「形成期のアーネスト・バージェスを解読する——序説」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 47: 1-15.
- 2016a, 「アーネスト・バージェスの博士論文における19世紀の社会主義理解——メソダイズム, 労働組合運動, フェビアニズム」『人間関係学研究』14: 49-66. (椋山女学園大学)
- 鎌田大資・中野正太, 2003-2005, 「初期シカゴ学派社会学の確立——E・W・バージェスの人と作品」『人文』(京都工芸繊維大学工芸学部) 51: 23-75, 52: 73-118, 53: 93-133.
- Manuel, Frank Eaward, 1956, *The New World of Henri Saint-Simon*, Cambridge, Mass.: Harvard

- University Press. (=1975, 森博訳, 『サン＝シモンの新世界』上, 下巻, 恒星社厚生閣.)
- Marx, Karl and Friedrich Engels, [1848] 2008, *Manifest der Kommunistischen Partei*, Meta Libri. (http://www.ibiblio.org/ml/libri/e/EngelsFMarxKH_ManifestKommunistischen_s.pdf. 2017年1月9日閲覧)
- (=1971, 大内兵衛・向坂逸郎訳, 『共産党宣言』岩波書店.)
- 三宅岳史, 2009, 「『創造的進化』における生物の機能と形態の問題——ベルクソンの目的性概念をめぐって」『哲学論叢』36: 44-55. (京都大学)
- 森博, 1987-1988, 「サン＝シモンの生涯と著作(一)-(五)」*Saint-Simon 1987-1988*: (1) 363-400, (2) 395-430, (3) 469-528, (4) 443-484, (5) 437-481.
- 中村秀一, 1989, 『産業と倫理——サン＝シモンの社会組織思想』平凡社.
- 1989a, 「サン＝シモン教と普遍的アソシアシオン——サン＝シモン派」『社会思想史の窓』刊行会, 『アソシアシオンの想像力——初期社会主義思想への新視角』平凡社, 31-79.
- Saint-Simon, Claude Henri, [1868-1878] 1977, *Œuvres complètes*, t. 1-6, Genève: Slatkine.
- (森博編訳), 1987-1988, 『サン＝シモン著作集』5巻, 恒星社厚生閣.
- Sampson, Robert J., 1993, “The Community Context of Violent Crime,” William Julius Wilson, ed., *Sociology and the Public Agenda*, Cal., Newbury Park: Sage, 259-286.
- Sampson, Robert J., Stephen W. Raudenbush and Felton Earls, 1997, “Neighborhoods and Violent Crime: A Multilevel Study of Collective Efficacy,” *Science*, 277: 918-924.
- Shaw, Clifford R. and Henry D. McKay, [1942] 1969, *Juvenile Delinquency and Urban Areas: A Study of Rates of Delinquency in Relation to Differential Characteristics of Local Communities in America*, revised ed., Chicago: University of Chicago Press.
- Spencer, Baldwin and Francis James Gillen, 1899, *The Native Tribes of Central Australia*, London, Macmillan. (<s://archive.org/details/nativetribesofce00spenuoft>. 2016年9月9日閲覧)
- 高良倉成, 2016, 「「社会」用語法による表象の特質について」『社会学評論』67: 73-88.
- Thomas, William I., 1905, “The Province of Social Psychology,” *American Journal of Sociology*, 10: 445-455.
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki, [1918-1920] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, Vol. 1, 2, New York: Octagon Books.
- Thrasher, Frederick M. (abr., Intro., James F. Short, Jr.), [1927] 1963, *The Gang: A Study of 1,313 Gangs in Chicago*, Chicago: University of Chicago Press.
- Zorbaugh, Harvey Warren, [1929] 1976, *The Gold Coast and the Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*, Chicago: University of Chicago Press. (=1997, 吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳, 『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社.)